



歴史は忘れるべからず

世界反ファシスト戦争勝利70周年を記念して



靖国神社に合祀されている

A級戦犯

中国社会科学院近代史研究所



五州伝播出版社



歴史は忘れるべからず

世界反ファシスト戦争勝利70周年を記念して

靖国神社に合祀されている

A級戦犯

中国社会科学院近代史研究所



五州伝播出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

靖国神社中的甲级战犯 : 日文 / 中国社会科学院近代史研究所编 ; 张毓英译 . -- 2 版 . -- 北京 : 五洲传播出版社 , 2014.10

ISBN 978-7-5085-2941-7

I . ①靖… II . ①中… ②张… III . ①第二次世界大战 - 战犯 - 史料 - 日本 - 日文 IV . ① K833.135.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2014) 第 253101 号

“历史不容忘记——纪念世界反法西斯战争胜利 70 周年”系列

监制 国务院新闻办公室

出版人 荆孝敏

统筹 付平

翻译 张毓英 王路芳

责任编辑 张美景

封面设计 魏向东

版式设计 王伟峰 申真真

靖国神社中的甲级战犯

出版发行：五洲传播出版社

地 址：北京市海淀区北三环中路 31 号生产力大楼 B 座 7 层

邮 编：100088

电 话：010-82005972 010-82007837

网 址：www.cicc.org.cn

承 印 者：浙江云广印业股份有限公司

开 本：710mm × 1000mm 1/16

印 张：8

版 次：2015 年 6 月第 2 版第 1 次印刷

书 号：ISBN 978-7-5085-2941-7

定 价：69.00



狂信的な軍国主義者

東條英機

卞修躍
010



中国侵略の特務の頭目

土肥原賢二

敖凱
020



南京大虐殺事件をつくり出した元凶

松井石根

卞修躍
028



真珠湾奇襲の命令を下した者

永野修身

徐志民
036



短命戦時内閣の首相

平沼騏一郎

許欣舸
044



中国侵略戦争の全面的な参画者

梅津美治郎

卞修躍
052



独伊日ファシズム同盟の推進者

白鳥敏夫

許欣舸
062



「九・一八」事變の主謀者

板垣征四郎

卞修躍
070



太平洋戦争の重要な参画者

木村兵太郎

徐志民
080



侵略拡張の戦争政策を吹聴した者

武藤章

許欣舸
088



A級戦犯の中で絞首刑に処せられたただ一人の文官

広田弘毅

許欣舸
096



戦争外交を推し進めた頭目

東郷茂徳

敖凱
104



日本を戦争に追い込んだ
「外交の手」

松岡洋右

徐志民
112



陸軍大将から内閣首相にまでの
ぼりつめた戦犯

小磯國昭

徐志民
120



歴史は忘れるべからず

世界反ファシスト戦争勝利70周年を記念して

靖国神社に合祀されている

A級戦犯

中国社会科学院近代史研究所



五州伝播出版社

前書き

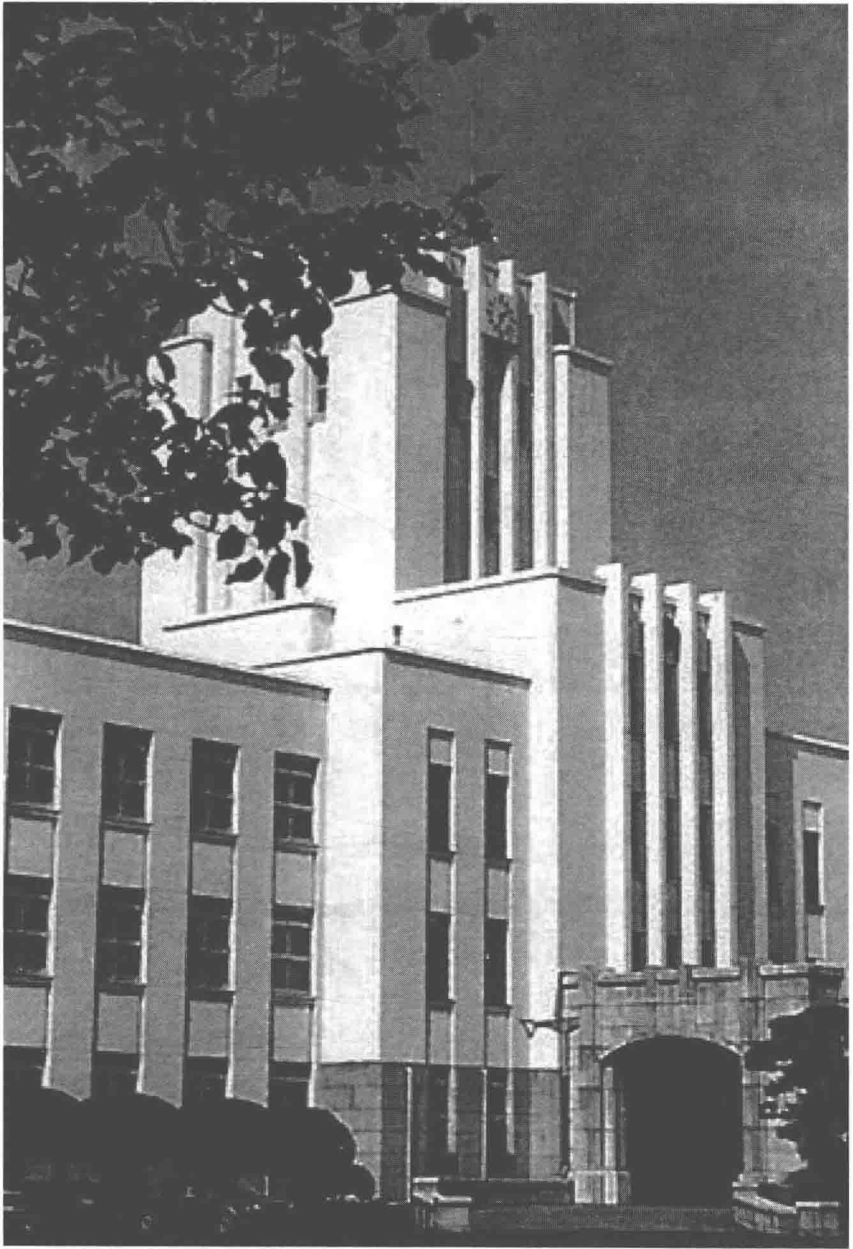
近年来、中日関係の健全な発展を妨げる重要な原因のひとつは、日本の政府首脳がたび重ねて靖国神社を参拝し、「他国が戦没者追悼に干渉すべきでない」、「参拝してはいけないという理由が分からない」として、その参拝行為を弁解したことにある。周知のように、靖国神社には第二次世界大戦で重大な戦争罪を犯したA級戦犯が合祀されており、これらのA級戦犯は両手に中国人民とアジア諸国人民の血がいつぱいついた、侵略戦争を引き起こした元凶と主謀者である。日本の政府首脳の靖国神社参拝は、日本政府がどのようにその侵略歴史を認識し、それに対処するかにかかわる根本的問題である。

われわれが歴史問題を正しく認識しなければならないと要求するのは、「歴史にこだわりつづける」ことではなく、歴史問題を正しく認識しさえすれば、中日関係を発展させ、アジア太平洋地域ひいては世界の平和と発展を保つことができると考えているからである。中日国交正常化の40余年の事実が裏付けているように、歴史問題を正しく認識すれば、両国関係が健全な発展をとげることができ、さもなければ、困難と挫折に直面することになるのである。「歴史を鑑（かがみ）とし、未来に目を向ける」ことを堅持し、安定した中日関係を保ち、発展させることは、中日両国人民の共通の利益に合致するのである。

この本は、靖国神社に合祀されている14人のA級戦犯の中国人民とアジア諸国人民に対する犯罪行為を明らかにすることによって、中国がなぜ日本の政府首脳の靖国神社参拝に反対するのかを知ってもらうようにしたものである。



靖国神社



極東国際軍事法廷の旧跡



狂信的な軍国主義者

東條英機

卞修躍
010



中国侵略の特務の頭目

土肥原賢二

敖凯
020



南京大虐殺事件をつくり出した元凶

松井石根

卞修躍
028



真珠湾奇襲の命令を下した者

永野修身

徐志民
036



短命戦時内閣の首相

平沼騏一郎

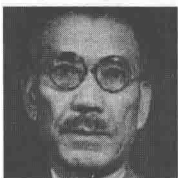
許欣舸
044



中国侵略戦争の全面的な参画者

梅津美治郎

卞修躍
052



独伊日ファシズム同盟の推進者

白鳥敏夫

許欣舸
062



「九・一八」事変の主謀者

板垣征四郎

卞修躍
070



太平洋戦争の重要な参画者

木村兵太郎

徐志民
080



侵略拡張の戦争政策を吹聴した者

武藤章

許欣舸
088



A級戦犯の中で絞首刑に処せられたただ一人の文官

広田弘毅

許欣舸
096



戦争外交を推し進めた頭目

東郷茂徳

敖凱
104



日本を戦争に追い込んだ
「外交の手」

松岡洋右

徐志民
112



陸軍大将から内閣首相にまでの
ぼりつめた戦犯

小磯國昭

徐志民
120

1948年11月、極東国際軍事法廷は25人の日本A級戦犯に対し、日本の東アジア、太平洋・インド洋地域における軍事、政治、経済の支配的地位獲得を共同謀議し、陰謀を企て、そのための侵略戦争を行った罪を犯し、陰謀・画策の上中国東北部三省占領・中国全土支配を目指す対中国侵略戦争を準備・発動した罪を犯したとする判決を言い渡した。裁判で被告全員は平和に対する罪、戦争法規慣例違反の罪、人道に対する罪のうち1項目または2項目、あるいは3項目すべての罪を犯したとされた。板垣征四郎、東條英機、広田弘毅、木村兵太郎、松井石根、土肥原賢二、武藤章ら7人が絞首刑、白鳥敏夫、大島浩、嶋田繁太郎、岡敬純、賀屋興宣、荒木貞夫、鈴木貞、梅津美治郎、木戸幸一、南次郎、平沼騏一郎、橋本欣五郎、畑俊六、小磯國昭、星野直樹、佐藤賢了ら16人が無期懲役、東郷茂徳が禁固20年、重光葵が禁固7年の判決を受けた。

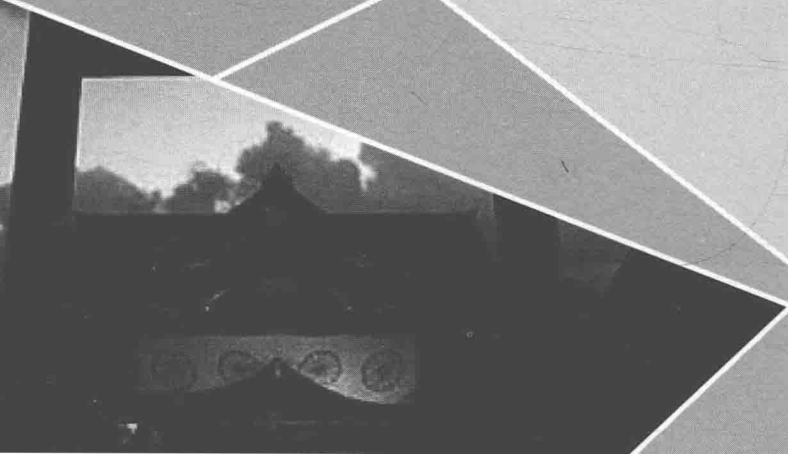
1965年、日本厚生省引揚援護局は東京裁判で死刑判決を受けた7人および巣鴨プリズンで死亡・仮釈放後死亡した7人、合わ

せて14人の名簿——祭神名票を靖国神社に送った。靖国神社側は崇敬者総代会で受け入れを表明した。その理由は「戦争事変で国の命令に従い、公務のため献身した」のだから、当然受け入れるべきだ、というものであった。その当時、国会では自民党の提出した靖国神社法案が審議中で、大きな抵抗に遭っていた。これら14人を合祀すれば、これ以上の強い反対と批判を招くとの懸念から、「面倒事」を起こさないため、靖国神社側は1978年まで実際の合祀をしなかった。この年、靖国神社の崇敬者総代会で14人の合祀が決定され、同年秋季例大祭前日の10月17日に合祀が行われた。しかしこの件は、1979年4月19日に新聞で報道されるまで明らかにされなかった。この時合祀された14人の日本A級戦犯は、東條英機、板垣征四郎、土肥原賢二、松井石根、木村兵太郎、武藤章、広田弘毅、平沼騏一郎、小磯國昭、白鳥敏夫、梅津美治郎、東郷茂徳、松岡洋右、永野修身である。



狂信的な軍国主義者

東條英機



◎ 卞修躍

東條英機は第二次世界大戦の中で、ヒトラー、ムッソリーニと同様に知られた三人のファシズム頭目の一人で、日本軍国主義がアジアと中国を侵略した時の戦犯のトップ格である。東條が日本陸軍大臣と内閣総理大臣であった時、対外侵略戦争をほしいままに画策、拡大し、「大東亜共栄圏」の確立を吹聴し、日本の軍隊は狂気のようにアジアの10カ国と地域を侵略し、ハワイ真珠湾を奇襲し、米日太平洋戦争を引き起こし、国際法に違反して細菌戦を行い、数万人にのぼる連合軍の捕虜を虐待し、数千万もの人々に生き地獄のような苦しみをもたらした。

軍閥家系出身の軍国主義分子

東條英機は1884年12月30日東京の軍人の家庭に生まれる。父親の東條英教は士官から一步一步と陸軍中将まで昇りつめた軍人で、甲午戦争（日本では「日清戦争」といわれている。1894年、日本は強硬に甲午戦争を引き起こし、清王朝に屈辱的な『馬関条約』の締結を迫り、遼東半島を日本に割譲させた。）の時期には大本営の参謀であった。その後『日清戦史』編集部長をつ

A級戦犯

とめ、日露戦争以後、日本軍第8旅団旅団長、在郷近衛第1旅団旅団長、朝鮮京城防御旅団旅団長を歴任し、晩年軍事書籍の編纂に従事し、『戦術麓の塵』などの著書がある。東條英機は幼少の頃から軍国主義思想と武士道精神に染まり、1899年9月から1904年5月まで、東京陸軍地方幼年学校、陸軍中央幼年学校で、厳格な軍事教育を受けた。東條の学業の成績はそれほどよくなかったが、けんか好きで、あくまで負けを認めず、「けんか好きの東條」といわれた。同時に、彼は軍事教官の「戦争の中で勇敢に突進し、死を恐れず、日本の征戦のために手柄を立てよう」との「訓示」に大きな影響を受けた。1904年6月、東條は陸軍士官学校に入学し、1905年4月に卒業した際に、陸軍歩兵少尉の階級を授与され、卒業を前にして、東條は第17期卒業生300人の総代として宮中の振天府で「天皇のために命を献げ……満洲の土地で粉骨砕身しても惜しまない」と誓った。卒業後、中国の東北地区に来て、日露戦争（甲午戦争以後、帝制ロシアは中国の旅順、大連を強引に租借して、中国東北地区への道をきりひらき、その勢力を中国東北地区全土に広げた。日本は帝制ロシアともう一度中国東北地区を分割するため、1904年2月8日旅順港に停泊しているロシア艦隊を攻撃し、2月10日、日露両国は宣戦した。その後、この二つの帝国主義国は中国の土地で一年半にわたって戦い、これは歴史上「日露戦争」と称される。1905年9月、ロシアが敗戦し、「ポーツマス講和条約」の締結を余儀なくされ、長春を境として、南は日本の勢力範囲に属し、北はロシアの勢力範囲に属することになった。）の最終段階において戦闘に参加した。1907年12月、東條英機は歩兵中尉に昇進し、1912年、陸軍大学に入学した。1915年、東條英機は日本陸軍大学の第27期を卒業し、陸軍歩兵上尉に昇進し、近衛歩兵第3連隊中隊長に就任した。その後、陸軍省副官、駐ドイツ大使館武官、陸軍大学教官、陸軍軍務局職